
歳分かれの国

新次元

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歳分かれの国

【Nコード】

N9093F

【作者名】

新次元

【あらすじ】

この世界では老人と大人と子供がそれぞれ分かれて、国を作っています。チキンは子供の国の住民で、教育係のラタと大変仲がいいです。しかし、明日、ラタは二十歳を迎え、大人になってしまいます。大人になれば、子供の国にはいられません。そこでチキンは

HP <http://2minutesblend.web.fc2.com/mailcontraventhotmail.co.jp> を@にしてください

確かに始まり

一人の少年が寝転がって、それはそれは深い夜空を見上げています。そうしていると、彼はずいぶんと自分が小さく思えてきて、つい溜息を漏らしてしまいました。

ここキンダーキングダム　こどもの国　の周辺には、灯というものはありません。ですから、とつぷりと闇につかっているはずなのですが、周りはうすぼんやりとしています。浄化石のおかげです。

仰向けになって足を組む少年　チキンは浄化石を、ひょいと拾い上げました。この石は、とっても不思議な石なのです。

まず一つ目、もういったように、少しとはいえ光を放っていること。

二つ目、それは不浄石に触れると、いつそう激しく光ること。

三つ目、これは石とされているものの、柔らかくて寝転ぶにはちょうどいいものであること。

そしてなにより、これが汚水や腐ったパンから、すっかり汚れを取り除く力を持っている、ということなのです。

「うんしょっと」

深い夜空、満天の星に見飽きたチキンは、身を起こしました。東を見ると、そちらには不浄石と浄化石が混じっているところらしく、まぶしいくらいに光っています。それを見ていて、全然夜らしくないや、と彼は思い、ふと時間のことを思い出しました。

そろそろ十時かな、と彼は背丈に似合わぬロングコートのポケットから、懐中時計を取り出しました。

どんぴしゃり、です。彼は慌てて立ち上がり、キンダーキャッスルに戻るうと、走り出しました。

その時です。彼の恐れていた吠え声が、夜空に突き刺さりました。まずい、まずいぞ、とチキンの内心は、冷たさで一杯です。そう、

十時を過ぎれば、今チキンのいる石原から大人の国　アダンテイ
ーキングダムに向けて、怪物たちが進軍するのです。彼らの目的は、
キンダーキングダムと同じです。そう、大人を倒す、という目的で
す。

しかし、この怪物が大人のみならず、自分たち子供を襲わない、
という保証はどこにもありません。ですから、夜の外出は控えるよ
うに、チキンは口を酸っぱくしていわれています。

でも、どうしても行きたい。チキンは、そう思っています。

ここには、他にも研究に役立つ石が転がっているのですから、彼
がそう思うのも無理はありません。

まだ十一歳になったばかりの彼は、あまり運動する方ではありま
せん。しようとも思っていない。ですので、彼の息はとつくに上
がっていました。

息苦しいし、走るのには向いていないぶかぶかのブーツ。もう走
るのを止めようか、という考えが何度も頭をかすめます。でも、そ
のたびに、ここは危険だ、と自分にいい聞かせるのでした。

石原をなんとか走りきりましたが、今度は鬱蒼としている森の中
です。思うように走ることができません。

でも、ここまでくれば、怪物も来ないだろう、とチキンは足を止
めました。

「オオオオオオオオオオオ」

ああ、なんとということでしょうか、後ろの方から、野太い吠え声
が聞こえるではありませんか。

「なんでだよお」

泣き言を漏らし、そしてチキンは駆け始めるのでした。

萎まない疑問

どれだけの間、石原を走っていたのでしょうか。チキン本人も、もうわかりません。わかつているのは、ようやく前方にキンダーキヤッスルが見えてきた、ということだけでした。

「ああ……」

子供の子供による子供のための国、それがキンダーキングダムです。

安心して、チキンは走るのをやめました。ここまで来れば、怪物が襲ってきてても、心強い仲間たちが助けしてくれるはずですから。

普通の城と違い、キンダーキヤッスルは大変個性的です。

普通、壁は切り出された岩から造られるのですが、子供たちの城は、青、黄、赤の巨大レゴブロックで組み立てられています。尖塔は溶けかけたアイスのようにぐにやりと曲がり、中央からはドラゴンに見立てた楼閣がそびえ立っています。これは、矢倉としての役目も果たします。ええ、そうなんです、口を開けば、そこには望遠鏡があり、ここに敵が攻めてこようものなら、すぐに発見できるのです。

また、遊び心として、口からブランコを垂らしているので、暇な時は遊ぶこともできます。チキンは、よくそのブランコに乗りながら読書に明け暮れています。

さて、こんなにも変わった城を持つ国、キンダーキングダムに多くの国民は、大人を、そして老人もちよっぴり嫌っています。嫌っている理由は、なんなのでしょう。チキン自身、そのところに首を傾げています。歳だけが違うという理由で、どうして人間は離れ離れにならないのでしょうか。なぜ、同じ種族なのに争うのでしょうか。

いえ、理由はしっかりわかっています。そう、大人はずる賢くて、冷たくて、子供をバカにします。子供には権利がない、といわんば

かりのことをしてきました。

自分たちは日頃から遊んでいるというのに、子供にはやれ勉強だの、やれ手伝えだの、嫌なことをたくさん押しつけてきます。

というようなことを、チキンは本で知りました。実のところ、チキンは大人にも老人にも会ったことがありません。歳に関係なく、人々が笑い合っていた時代というのは、それはもう遙か昔の物語なのです。今となっては、その時代を知る方法は、読書しかないのです。そして、それが真実かどうか……子供たちは、すっかりそのことを信じていますが、チキンは違いました。

彼は、どうにも過去の真実がちぐはぐな気がしてなりませんでした。例えば、大人であっても、当然、子供であった時代があったはずなのです。それは、老人にもあてはまります。ですので、勉強や手伝いは、大人もやってきたことなのです。なにも、今の子供たちにだけ押しつけられた厄介ごとではありません。

さらにいうと、どうして大人の国は滅びないのでしょうか。年齢別に世界が分かれてから、すでに五百三十七年経った、と書物にはあります。もし、この書物が正しいのなら、とっくの昔に、アダンティーキングダム 大人の国 は滅んでいくはずなのです。でも、現に、アダンティーキングダムは存在し、気まぐれに、チキンの住む国と戦っています。

エルダリーキングダム 老人の国 についても、よくわかりません。老人の国は、それこそ大人の国より早くつぶれているはずなのに、まだ存在します。これは、子供の国にもいえることです。赤ん坊はどこからも出てこないし、人数は減っていくばかりなのですから。

老人と大人は、敵対しています。今はにらみ合っただけで、目立った戦争を起こしてはいないものの、いずれ近いうちに戦が起こる、とチキンは考えています。

なぜなら、老人が大人に攻撃を加えなくなったのは、単なる資金と人員不足だからです。戦争を続けるのには、お金と人が水のように

に流れていって、消えてしまいます。老人たちは、身体こそ弱いものの、頭はキルダン大陸一なのです。考え抜かれた戦略、蒸気を動力として戦うロボット、それが彼らの強力な武器です。

一通り、老人と大人のことにについて考えていたチキンへ、ふいに光が向けられました。どうやら、城の守衛がこちらに気づいたようです。

「化け物か？」

「いや、違う。あれは人だ」

僕だよ、とチキンは大声でいいました。

「ああ、わかってる」

守衛が、怒鳴り返します。息を激しく弾ませるチキンは、すたすたと歩いて、開かれた城門をくぐりました。

硬派な王様？

ウサギ型ポーチを肩からかけている女の子が、チキンの前に立ちはだかります。場を明るくしてくれる笑みを、今晚の彼女は見せてくれそうにありません。それどころか、目をつり上げ、わなわなと腕を震わせていました。

「駄目じゃない！ どうして、勝手に外に出るの？ 夜中に出歩くのは、駄目っていったでしょ？」

ラタが、こつぴどくしかつてきます。

彼女は、チキンのことが心配でなりません。いつもチキンのやること、なすことをはらはらしながら見守っています。

ラタは、チキンにとって母のようなものでした。

チキンは、ラタにとって子のようなものでした。

「研究や開発を頑張るのもいいけど、もし怪物に襲われたらどうするつもりだったの？」

十一歳のチキンは、キンダーキングダムで、一番若い年代です。

ですので、ラタだけではなく、他の多くの子供たちから、何かと心配される身なのです。

「ごめんよ。九時半には石原を出ようとしたんだけど、気がついたら、もう十時になってて」

いい訳をしてみると、ますますラタが顔を赤くして怒ってきます。少しくらい許してくれてもいいのでは、と思えます。

ですけど、チキンが一人で夜空の下を歩く、というのは、絶対に九時四十五分には城内に戻ることに、という約束の下、ラタが許してくれたのです。彼女がカンカンになって怒るのも、仕方ないといえは仕方ありません。

「もうそのへんでいいんじゃないの？」

どこからか、しわがれた声がしました。

この声は、とチキンが考えていると、

「着地いいいい！」

ラタとチキンの間を、何かが落ちました。続いて、低くて、潰れたような汚い音とともに、もくもくと茶色の煙が昇ります。

「……え？」

ラタの顔からは、すっかり怒りが消えています。

チキンはそれを見て安心し、それからさっきの声について考えてみました。

「ゼブルだ！」

パツと顔を輝かせ、チキンは上を見ましたが、どこにも人影がありません。不思議に思っていると、

「ここだ、ここだ、ぐぬう……」

と、なんとも情けない声が、足元から聞こえてきました。もしかして。

チキンは、煙がおさまるのを待ってみました。そしたら、やっぱり、レゴブロックの床に、人型の穴があいています。

きつと、ゼブルは見事着地を決め、ラタの怒りをしずめようとしていたのです。しかし、失敗したのでしょうか。

「えーつと、もしかして、ゼブルなの？」

ラタも、ようやく着地に失敗し、いえいえ、それどころか、城の床を破壊した犯人が誰なのか気づいたようです。

「あらよつと！」

人型の穴から、ガゴン、というかなり大きい目の音がし、

「いてえええ」

とゼブルの声がします。

「うぬう。人型の穴というのは、通り抜けにくいもんだ。よっしゃ、ここは一つ、どでかい穴でも作ってやるうじゃねえか！」

「ま、待つ」

ラタが止める声より先に、人型の穴は巨大化してしまいました。

元気に咲いているヒマワリのような穴が、床にできあがっていま

す。

「うっしゃあ、ま、俺がいたいのは、子供は自由に生きろってことよ」

グハハハハ、と高笑いしているゼブル。子供の国の王様でもないのに、自作の王冠をかぶり、王族が好きそうなマントまで着ています。かなり本格的な仕様です。しかし、首からかけているごつい十字架のペンダントや、ベルトのバックルがピエロといったところが、やはり彼は王様ではない、という印象を強めています。

ラタは彼を叱りつけようと、口を開きかけましたが、つつい吹きだしてしまいました。

「あははははっ」

「そうそう、笑っていればよろしいのだ。ガハハハッ」

次の王座を狙うゼブルですが、王になるには十七歳以上でないといけません。まだ歳が十六の彼には、いくら力があっても、王にはなれませんし、そもそも現役の王セブンは、ずば抜けて強いのです。ゼブルが挑んだところで、てんで話にならないでしょう。

「ま、今日も、俺は特訓、特訓」

ヒュウ、と口笛を吹き、ゼブルはかがんで、チキンに顔を近づけました。

「まあ、お前さんも、あんましラタ姉を怒らせるんじゃないぞ?」

「う、うん」

少しつまづいた返事でしたが、ゼブルは満足げに何度か頷き、レストランへと足を運んでいきました。

寝る前に得るだけ

チキンの部屋の床も、レゴブロックです。そこには、きちんと薄い絨毯が敷かれています。手巻き時計が、チツチツチツチ、と忙しくなく時間を刻んでいました。それ以外は、全くの無音か、というところでもなく、時おり、外から化け物の小さな叫びが聞こえてきます。

少し怖いです。深みのある暗さが、部屋に腰を下ろしているのですから、なおさらのことです。石原では浄化石が光っていてくれたし、何より月があったので、外では別にそんなこともなかったのですが。

もちろん、オイルランプはあるにはあるのですが、オイルを無駄遣いしてはいけない、とラタから強くいわれているのです。

読書は、明るいうちにしておきなさい。

これがラタの口癖です。

溜息をついて、チキンはベッドにもぐりこみ、色んなことを考えていました。暗くても、考えることくらいはできます。

今日、彼が考え始めたことは、どうすれば戦争を終わらせることができるか、についてでした。

子供も大人も老人もいがみあってばかりで、仲直りしようなんてこれっぽっちも思っていないません。

一度、チキンはセブン王に試みてみたことがあります。

「大人と仲直りするのダメなの？」

答えは、「できているのなら、とっくにしている。無理だからこそ、今もなお俺たちは戦っているのだ。とにかく、君は開発に励んでくれ」でした。

戦争で役立つ発明、それがチキンの仕事です。このキンダーキャッスルの造りにしろ、戦争用ロボットにしろ、全て彼が発案、作成したものです。もっとも、城の方は、チキンの生まれる前からあつ

たもので、それに新設備をつけ足した程度ですが。

しかし、最近、それが嫌になっってきました。どうして、争いの種をまかねばならないのでしょうか。チキンは、疑問に思っています。でも、ラタもゼブルも、いいえ、キンダーキングダムにいる国民全てが、口を揃えて、大人は憎い、といいます。

一体いつどこで大人と関わった、というのでしょうか。もう、それはとっくの昔の話です。なにも、わざわざ五百数十年前の話蒸し返すのは、ちょっとどうかな、とチキンは思うのです。

さらに、自分がいつからここにいるのか、チキンはわからないので、みんなに聞くのですが、

「どうして、そんな疑問を持つんだい？」

といわれて、終わりです。だいたいみんなそんな感じの返事をします。

どうやっていつどこから、ここにやって来たのか、なんて疑問は、みんな感じないようで、チキンは変わったやつだ、と思われて終わるのでした。

「ダメだ、ダメだ！」

チキンは、うつん、と唸って、自分の頭をぽかぽか叩きました。

こんなことは毎晩考えていることです。でも、わかりません。多分、これからも一生わからないでしょう。

チキンは考えをそこから離し、ふと頭に浮かんだ平和について考えてようとして、眠りの中に入ってしまいました。

授業は終了？

子供の国では、子供が子供に勉強を教えます。といっても、教える子供は十八歳から十九歳の者です。

キンダーキャッスル北東区の子供たちの教育係は、ラタが受け持っています。

今日の話は、戦争について、です。

教室では、チキンを含む二十一人の子供がワイワイガヤガヤと騒いでいます。この床は、青のレゴブロックだけで造られていて、机と椅子はぴかぴかと光っているものもあれば、くすんでいる物もあります。ちなみに、前にある教卓は、かなりオンボロです。多分この教室にある机の中で最も年老いているものでしょう。

前には黒板があるにはあるのですが、ラタはほとんどそれを使いません。なるべく、子供たちに書かせようとするのです。

ところで、チキンは十一歳にしてラタ、そしてゼブルと同じように、幹部に就いていましたし、何より発明係を任せられています。

そんな彼ですから、授業に出なくてもいいだろ、とよく友たちからいわれるのです。

「やいやいやい、とつても頭のいいお前が、どうしてここにいるんだよ？」

今日もまた一人の少年が、からかってきます。そして、他の数人も、

「どうやって、いつ、どこから、俺たちがここにやって来たのかでも、また考えてたのか？」

と突っかかってくる。

「そうかい、そうかい」

チキンは変わり者扱いには慣れているので、軽く流しておきました。

と、透き通った鐘の音が、カーン、カーンと鳴りました。授業開

始のチャイムです。

しかし、教室は相変わらず、大騒動です。

「はい、はい、みんな、着席、着席！」

ラタが茶色の扉を開けて、入ってきました。

「ベル着って言葉もう知っているでしょ？ 早くしなさい！」

「もうしているよ！」

くすんだ灰色のフードをかぶっている少年が、答えます。

「冗談いってないで、さあさあ」

とラタは少しムツとしながらも、優しく注意するのですが、

「ほら見てみるよ」

と少年が、ジップフードをまくり上げ、『ベルトを着用』しているのを見せます。

しばし意味が飲みこめず、かたまっている子供たちでしたが、やがて彼のいう『ベル着』がわかって、笑いの渦が生まれました。

それは、どんどん大きくなって、嵐になりましたが、

「うるさい！」

ラタの鋭い声によって、あっけなくつぶされました。彼女は怒ると、怖いのです。いえいえ、彼女の怒る様子が怖い、というより、居残り、宿題が増える、といった罰が恐れられているのです。

大人しくなった子供たちを、ラタは満足げに見て、頷き、

「それでは授業を始めましょう」

さっきまで怒っていたのが嘘なくらいに、爽やかに授業を始めるのでした。

真実を信じる

嵐の前の静けさならぬ、嵐の後の静けさです。

「今日はね、とびつきりの授業をやりませう」

とびつきり、ってなんだろう、とチキンは、わくわくしてきました。算数だとか理科だとか、簡単すぎて、チキンにとってはつまらなかつたのです。

「今日やるのはね、私たちについて、です」

ラタは、流れるように、「私たち」について語り始めました。それは、老人、大人、子供についてのことです。チキンが今まで何度も考えてきたけど、結局何一つわからなかつた問題でしたから、ますます彼女の話の面白さを覚えます。

「私たちは、きつとこれからもずっと大人、そして老人とはわかりあえないでしょう。だから、戦争もなくならないはずですよ。」

エルダリーキングダムの場所は、アダンティーキングダムの向こう側にあります。そう、場所的な関係で、今はまだ私たちと戦争していないけど、でも、もし老人たちが大人たちを倒したら？ きつと、ここは狙われるでしょう」

子供たちは息を飲んで、ラタの話に聞き入っていました。今まで、どうしてこのような授業をしてこなかつたのでしょうか。生徒たちは、内心で首を傾げていました。

いつも、決まってるつまらない算数、国語、理科、社会、ばかりなのですから。一体全体どういう風の吹き回しなのでしょう。でも、誰一人として、その疑問を口にしません。

もし、聞いてしまえば、ラタが、あ、そうね、と行って、せつかくの心躍る話が中断されてしまうかもしれないのですから。

「老人たちは、子供たちをも憎んでいます。この国も、子供しかいないとはいえ、元気一杯の国民ばかりで、植民地にされてしまう、と恐れているから、というのが理由です、と先生以外は閲覧禁止の

本に書かれていました」

どうにかして自分もその本を借りられないものか、と考えているうちにも、ラタはみんなに真剣な面持ちで語りかけ続けています。

「近い将来、人間は滅びるでしょう。だって、戦争して人が減ることとはあっても、増えることはないからです。そして、大人を除く私たちは子供を生めません」

子を生む。チキンは、そのことに関する書物を貸してくれ、とキングダーキャッスル内の図書館員に頼んだことがあります。でも、なぜかまだ早い、と断られました。

十五歳になつたら、借りてもいいそうです。

「確かに、この国にも、たまーに赤ちゃんが生れます。でも、戦争で死ぬ人、そして怪物化してここを去る人々を考えれば、滅る方が明らかに多いです。だから、もうすぐこの国は滅びてしまうのです」

ずいぶんと深い話です。ここまで、いってもいいのでしょうか。チキンは不安に思い始めました。

「みんなも、もう知っているでしょ？ あの怪物は、私たちの中から生まれる悪なのです。怪物になり、意思を失い、自分を見失い、心が真っ白になってしまいます」

ラタの声が、少し小さくなります。

「子供だけではなく、人間であれば誰でも、怪物になるかもしれないのです。でも……それでも、敵が誰なのかわかるんでしょうね。だから、私たちから生まれた怪物は大人の国へ攻めにいくのですよ。そう……ここまで、私たちは憎み合っている。心底、嫌っている……。きつと大人も子供も、そして老人も歩み寄ることはないでしょう。和解による戦争中止は無理です。誰だって戦争はしたくないです。十八歳になった男の子たちを、戦地に行かせたくなんかありません……」

決まり悪いくらいに嫌い

十八歳以上の男子は、戦争に備え、訓練を積みます。そして教育係になるにも、十八歳以上しかねないので、結果として先生役になるのは、女子だけ、ということになっています。

「最近、私も思うようになったことがあります。それは、どうして子供はこうも大人を嫌いなのだろうか、ということですよ」

何人かの生徒が、自分の胸に手を当てたり、眉根にしわを寄せたりしています。思い当たるところがあるようです。

チキンは前々から思っていたことだったので、疑問に思うことはありませんでした。ただ、今になってラタが自分のいつていたことに気づいてくれて、ちょっぴり嬉しかったです。

「理由もないのに嫌い、この感情はなんなのでしょう……。でも、理由がないのだから、子供たちは大人を、そして老人を、理由なしに好きになれるのではないのでしょうか」

教室の空気が、固まりました。

「私には、もう時間が残されていないので、みなさんで、その答えを探してください。ごめんなさい」

ラタが、ぺこり、と頭を下げます。

みんな、キョトンとしました。チキンも、ラタのいつていることがわからず、聞こうとしましたが、口の中が乾いて、うまく喋れません。

なにか、とてつもなく嫌な予感がするのです。まるで、彼女が、彼女が

「今日で、私の授業は終わりですよ」

別の静けさが、教室に流れこんできました。ぱりぱりに乾いた嫌な空気です。

「今日が終われば、私は二十歳になります」

「あ」

「あ、ああ」

「あ あ あ」

思わず、意味のない言葉を、こぼしてしまった生徒もいました。気づかず、ぽかん、と口を開けてしまった生徒もいます。

二十歳、それは子供が大人になる境界線であり、味方から敵になる瞬間です。

戦争に行かなくてはならない時です。

二十歳になれば、この国では、大人になってしまいます。そして、大人はこの国にいられないのです。しかし、今まで仲間だったことを考えると、ただ追いつくのでは、あまりにかわいそうです。だから、大人と戦わせ、きれいにその命を散らせてやるう、というキングダーキングであるセブンのせめてもの計らいから、そうなったのです。

「嫌だ！」

チキンは、声を大にしてラタに訴えました。

「ラタ姉が、死ぬなんて嫌だ！」

それに続いて、他の生徒も立ち上がります。

「もっと教えてよ」

「どうして死ぬんだよ」

「なぜ、戦争に行くの？ 私と同じ女の子じゃない」

消えた二人

乾いた静けさがつぶされ、悲しい声と、床を優しく叩く涙の音がしました。

「静かにして！ それがこの国で決まっていることだからよ！」
ラタの口調が、思わず砕けてしまっています。

「理由がないものなんて、守らなくていい！」
フードの少年が、主張します。

「じゃあ、君は理由もなく、どうして大人を憎めるの？」

「それは……」

理由のない憎しみを問われると、一気にフードの少年は、しゅんとなりました。

「私は幸せよ。だって、そうでしょ？ 私は明日から大人になるかもしれないけど、大人を殺せるかもしれないんだから……そして、私は子供のままで死ぬる……」

そうです。二十歳を超える前、つまり十九歳の最後の日に、自ら怪物になって、大人の国を襲うのです。

どうやって怪物になるのかというと、不浄石によって、です。浄化石を敵とするその石は、さわった存在を、汚してしまいます。

例えば、新鮮なリンゴやノドをうるおす水は腐り、汚れた存在はもつと深い不浄へと落ちてゆきます。

一見、とても危険なものです。子供がさわっても、大丈夫です。ただし、大人がさわれば、不浄石は効果を発揮し、肉体を老化させるようです。

以前、セブンの提案によって、投石機を用いて、大人へ投げつけたことがあります。

すると、大人たちはみるみると老けていったのです。この作戦は大成をおさめました。しかし、次回から大人は『清めの鉄』から作られた鎧を着ていたので、二度目の大成はありませんでした。

このように不浄石というのは、大人にとっては大敵です。そして、大人になりかけの者が、これに触れると、怪物となるのです。きっと、大人と子供の間にいる存在だからなのでしょう。

死ぬ前に、せめて大人一人くらい道連れにしてこい。

こういう考えは、確かにこの国では正しいのです。でも、いざ自分と親しい人、大事な人が、怪物になる、となると話はまた違ってきます。

「怪物になんかなつちや嫌だよ！」

チキンは、ラタに訴えました。そうです、明るい群青色の髪、小作りな顔、ちよつとだけ日に焼けた感のある白い肌、そんな彼女が怪物になるなんて考えられません。考えたくもありません。

「でもね、チキン、自然に怪物になる人だっているでしょ？ それに比べたら私はとつても幸せよ」

ラタがにつこりしてみせるのですが、チキンはそれが嘘の笑顔だと察しました。心からの笑みではないのです。やはり、彼女は怖がっているにちがいありません。

「私ね、思うのよ。自然と怪物になる人って、この国のためになりたい、なりたい、っていう気持ちが強いんだ、って。だから、不浄石の力を借りずに怪物になって、大人たちをやっつけにくいのよ。でも、私の場合、その気持ちがちよっぴり足りなかったのね。だから、不浄石を借りて、大人を倒す……」

ダメね、私って。教え子の……ピピス、やブレテイの方が、よっぽど、私より、できて、いるわね。彼らは、怪物になった、んだから……」

ゆつくりと、吐き出すようにラタがいます。

「嘘だ！」

チキンは、声を張り上げました。ラタのいうことが本心ではない、と彼は知っています。

もつずいぶんと前のことになるのですが、このクラスには、ピピスとブレティがいました。

ピピスは、緑のフードがトレードマークの気むずかしい男の子でした。自分と意見が合わなければ、意見が合うまで、話し続けたこともありません。チキンともたびたび意見がぶつかり、長々と話すことがありました。魔法が得意で、よくチキンに水鉄砲の魔法を撃っていました。

ブレティは、くたびれたショルダーバッグを愛用している男の子でした。いつも面白い冗談をいい、みんなに笑いを与えてくれました。勉強が苦手な彼でしたけれど、目はとてもいいので、カンニングをしよっちゅうしていました。たびたび、ラタに注意されていたものです。しかし、その目の良さを買われ、監視を任されていた。

この二人は、怪物になつて消えました。どうして突然怪物になるのかは、いまだにわかっていません。ただ、わかっているのは、子供だった怪物は大人へ牙をむき、大人だった怪物は子供と老人へ牙をむき、老人だった怪物は大人へ牙をむく、ということだけです。

死は無駄に……

「そうだ、そうだ！ チキンのいう通りだ！ ラタ姉は、ピピスやブレテイの方がよくできたやつらだって、思っただけじゃないか！」
クラス全員が立ち上がり、主張します。

「そうですね。ピピスとブレテイが怪物としてここを去った時、ラタは自分の部屋で、夜な夜な泣いていたのですから。」

「食もノドを通らず、体調を崩して、授業どころか、日常生活もままならない状態に落ちてしまいました。その間、別の先生が代わりに授業をしていたのです。」

「え？ ど、どうして、そ、そう思うの？」

ラタの言葉が、もたつきます。

「今まで黙っていたけど、俺たちはラタ姉が、夜中に泣いてんの知ってた」

「彼らの目と耳は、鋭いのです。ラタは隠れて、静かに泣いているつもりでしたが、授業を三日連続休み、不審に思った数人の子供が偵察に乗り出して、知ってしまったのです。」

「だから、ラタ姉がいつてるのは嘘だ！」

「フードの少年の声は、やや荒れていました。よほど、心の中がぐちゃぐちゃになっているのでしょう。」

「あの二人がいなくなると、俺たちも悲しかった。キンダーキングのセブンが、なんといおうが、俺たちはやっぱり悲しい。怪物になって、友人が消えるのは悲しい。そして、ラタ姉がいなくなるのも、やっぱり悲しいし、寂しい」

一気に、フードの少年が話しました。

「それを聞いたラタは、口元を両手で押さえました。目に涙がたまわってゆき、もう少しでこぼれそうです。」

「彼女は、ふいに走りだしました。そしてそのまま茶色の扉を乱暴に開けて、出ていってしまいました。」

「ラタ姉！」

チキンが叫び、追いかけると、残りの生徒たちも、だだだつと、押し合いへし合いしながら、扉へ突進します。

あれから、ラタは自室にこもったままで、子供たちが何をいおうと、返事してくれませんでした。何時間もねばりましたが、一向に出てくる気配もなく、チキンは諦めました。といっても、ラタを部屋から出すのを諦めただけです。ラタをそのまま怪物にしてこの国からいなくなる、というのを放っておく気はちつともありません。チキンも、本音をいえば、ラタが出てくるのを待ちたいのです。でも、それよりも、もっとやるべきことがある、と彼は確信したのです。

彼が今いるところは、チキンポット。それは、彼の研究所です。キンダーキングダムから歩いて五分の場所に、ぽつんと建っています。

形は、立てた卵を横から真つ二つに切って、その断面をえいやつとばかりに地面とくつつけた感じです。

この研究所は、偶然にも名前がチキンポットでした。まるで、チキン専用の研究所のように思えるのですが、実際は前からあったものです。とはいえ、中にはチキンが望んでいる設備がちゃんとあります。まるで、チキンの頭の中にある理想の研究所を取り出して、作ってみました、というくらいでした。

チキンポット

チキンポットは、キンダーキャツスルができた時から、ずうつとあるようです。だって、鉄板を組んで造られたものなのですが、痛みが激しくなって、雨漏りする時もありましたから。そんな時、チキンは鉄鉱石から鉄板を作って、上から重ねました。こういうことは、以前にも行われたようで、チキンポットはちぐはぐな色をしています。くすんでいる鉄板、きれいな鉄板が混じっているのです。さて、チキンは今日から明日に変わる前に、なんとしてでもラタの怪物化を止めなくてはなりません。

どうすればいいのだろう、とチキンは研究室にある設備を、なんとなく見回しました。

棚にきちんとしてしまわれているビーカー、フラスコ。

深みのある茶色の木製試験管立て。そこには、試験管が数本突き刺さっています。

そして、材料棚。そこには、チキンと、それ以前の誰かが集めてきた実験材料が詰め込まれています。もうこれでもか、といわんばかりに、です。

チキンは、きっちりと片づけなければ気が済まない男の子でしたが、ここばかりはどうにもなりませんでした。

というのも、チキンでさえ知らない、しなびた草の束、赤と青の斑点を背負ったカエルに近い生物のビーカー詰め、珊瑚の形をした黄ばんだ骨。

この中に、毒があるかもしれません。未知の材料ほど危ないものはないのです。ですから、チキンは決してそこに手を入れませんでした。

しかし、いつまでも放っておくのもどうだかな、とチキンは窮屈そうに身を縮めている材料棚の戸を開けてみました。

少し鼻にツン、とくるものがあります。慌てて、チキンは戸を閉

め、用具箱に、直行します。そこには、厚手の軍手、防毒マスク、実験用保護ゴーグルなどが入っています。

用具箱はしまい忘れていたので、中央にある丸机に、ぼんと置かれたままでしたので、ものの数秒でチキンは防毒マスクを装着できました。厚手の軍手もしようとしましたが、浸透するような毒だったら意味がないし、棚の物にはさわらないでおこう、と思い直しました。

さて、気を取り直して、再び材料棚の戸を開けました。今度は防毒マスクをしているので、異臭もわかりませんし、悪いガスでも、へっちゃらです。

「でも、僕は、なんだかつメが甘いよなあ」

そうなのです。徹底するなら、それこそ『守護石』から作られた防護服でも着ないとダメです。でも、そこまでは面倒なので、彼はしたくありません。それに、やはり材料棚に、猛毒を置くなんて、少し考えにくいです。

でも、さわるのだけは、チキンはしませんでした。ゆっくりと、棚の中を見ていきます。おや、右奥の方に、見慣れないものが見えます。

そうですそうです、扉を開けた振動で、右にあつた力エルもどきのビーカー詰めが、少し左にずれて、その赤いものが見えるようになったのです。

なんだろう、とチキンは目を凝らして見ると、なんとそれは赤いボタンでした。少し曇った赤色ですが、ちゃんとしたボタンです。

おそろおそろチキンは手を伸ばし、そのボタンを、ポチンと押ししました。指に伝わるちっちゃな反発が、少し心地よいです。

緻密な秘密

と、ガゴン、とくぐもった音がし、え、え、と思っっている間に、材料棚が横へと移動していくではありませんか。

これには、チキンも驚き、そして手を棚に入れたままなので、とっても焦りました。だって、何かにふれたら、とんでもないことなのですから。

「わわわわわ」

棚が横へ横へと動くのに合わせて、チキンも横へ横へ。

ああ、棚君、棚君、戻れ戻れ。

とチキンは念じてみましたが、棚はいうことをちつとも聞いてくれません。ずんずんずんずんと移動します。どれくらい移動したのでしょうか。気づけば、棚が元あった場所に、ぽっかりと穴ボコがあるではありませんか。

「それに、実際はあんまり移動してなかったか……」

ええ、そうです。棚は、チキンの背丈分くらいしか動いていませんでした。

チキンは、大口を開けたような穴を覗き込んでみました。

貝殻に耳を当てた時のような音色が聞こえます。いいえ、音色ではありません。もし音色なら、聞けば心が弾むものでしょう。しかし、これはどちらかというところ死者の泣き声に近いものがあり、聞くと心臓がキュツと縮こまりました。

思わず身震いし、チキンはゴックンと唾を飲み込みました。

この棚の奥にあったボタン。

けれども気づかれないように、置かれていたカエルもどきが入ったビーカー。

そして、不用意に棚に手を入れられない未知の材料たち……。

チキンの中で、切れ切れだった糸が、少しだけつながりました。

もしかしたら、この穴は発見されてはいけなかったものなのかもし

れません。

誰に見つかってはいけないのでしょう？

自分？

それとも子供に？

大人に？

老人に？

わかりません。でも、ただ一ついえることは、穴には危険な何か
がひそんでいるかもしれない、ということですよ。

行ってみたくてうずうずするのですが、今はラタのためにできる
ことを考えなくてはなりません。

チキンは心を鬼にして、その穴から離れ、丸机のそばに置かれて
いる椅子に腰かけました。

ラタを救うためには、彼女に不浄石を使わせないのが一番手っ取
り早いのです。ですが、ラタを説得することはできないでしょう。

だとしたら、チキンが何か発明して、それを解決するしかありま
せん。でも、一体全体何を発明すればいいのやら。

うんうん、と考えてみましたが、こういう時に限って、アイディ
アが浮かんできません。いつもなら、ぽんぽんと飛び出してくるの
に、です。

気分転換しよう、とチキンは考え、研究所を飛び出しました。

研究書で研究しよう

ちょうど今、前方から一羽の鳥が滑空してきました。海色を浴びた全身、翼のなびいている部分は、白波色です。種類は、ティカタ。幸運を呼び寄せる力がある、とされていますが、チキンはそんな非科学的なことは信じません。子供なのに、チキンは現実的なことにしか興味を覚えなかつたのです。

キンダーキャツルの楼閣、ドラゴンに見立てられたその口からたれさがっている麻紐の先に、板がくくりつけられています。樫の木から作られた、しっかりした板です。

ええ、そうです、ブランコです。チキンは、それに乗って揺られているところでした。

チキンは、浄化石について書かれている本をむさぼるようにして読んでいました。

不浄石が、人を怪物にするのなら、浄化石はきっとラタを元に戻す力を持っているはずなのです。問題は、どうやってラタにそれを触れさせるか、です。それに、そもそも浄化石にそのような力があるかどうかはまだ定かではありません。

ですので、チキンはこうして研究書を必死になって読んでいます。そして、今、読み終わりました。ですけど、答えはそこに書かれてありませんでした。ああ、どうすればいいのでしょうか。ラタの命は、もう少ししかありません。

空の浅いところが、朱色に染まってゆきます。もうじき、夜色で満たされることでしょう。

チキンは、盛大にくしゃみをしました。世界が夜にバトンを渡しかけているのですから、寒いのも無理ありません。それに、ここはとっても高いところですよ。

「おおーい、引き上げてくれ」

チキンは、上にいる守衛に頼みました。

思わず、ビーカーを床に投げつけてしまいました。ブカブカのブーツが、それを踏みつけます。

チキンはチキンポットに戻り、あらゆる研究書を読んだのですが、もうお手上げ状態でした。

「も、もうダメだ……。浄化石と不浄石の本が、少ない……。なぜなんだ……」

そうなのです、浄化石と不浄石についての本は、チキンも何冊か持っています。でも、そこには彼の求めている情報は何もありません。

おそらく、キンダーキャッスル図書館にあるのですが、チキンはまだ十一歳で閲覧禁止だよ、と図書館員にいわれたのでした。

「でも、でも、きっと浄化石が、ラタを救う鍵なんだ……」

しかし、その鍵がみつかりません。チキンポットにあるのは、読み終えた研究書ばかりです。

「待てよ……」

まだ探していないところがありました。あの穴ボコです。あそこの中に、もしかしたらラタを助ける鍵が転がっているかもしれせん。

何が待ち受けているのかわからない地下ですけど、もはやそんなことといってられません。

穴ぼこで輝こう

チキンは心を奮い立たせて、穴ボコに、ひよいと顔を入れてみました。すると、ああ、またあの苦しそうな呻きが耳を突きます。

でも、もうここしかないのです。チキンが調べられるところは、ここくらいしか……。

防毒マスクをしようか、とも思いましたが、止めました。危険な香りはします。ですが、わざわざ人を殺すような仕掛けを作っておくのは、考えにくい、とチキンは判断したのです。

穴は、次期キングを狙うゼブルより頭一つ分くらい高いです。

チキンはえいつ、と入りました。中は薄暗く、ランプを持ち込まなきゃ、と思い、引き返そうとしました。

しかし、パチパチパチパチと柔らかな光が産声を上げ始めるではありませんか。

ぼんやりとしていた空間でしたが、すっかり明るくなっています。頭上にぼつり、ぼつり、と発光石が埋め込まれているのです。これは、動くものに反応して光る石です。どう考えても、訪問者を歓迎しています。畏かもしれません。しかし、ここまで来れば、もうどうにでもなれ、です。

チキンは一歩、一歩進みました。この穴ボコは下へ下へと進んでいます。大分いい加減な造りでしたが、階段のような段差がありました。降りるたびに、土が崩れて、落ちてゆきます。自分は落ちないように、とチキンは慎重に降り続けました。

しばらくすると、開けた場所に着きました。ここも最初は暗かったのですが、壁や天井に埋め込まれている発光石が、闇を追い払います。

闇がすっかり消えたここは、適当に作られた段差と同じように、荒削り感のある場所でした。

壁にはガリガリと巨大猫が引つ掻き回したような痕がありました

し、床も床というには、デコボコしすぎです。落ち着いて歩けたものではありません。

「おや？」

地面に気を取られているチキンでしたが、視線を上げてみて、気づいたことがあります。中央に、ぽつんと寂しそうに本が横たわっているのです。それは、平らな石の上に乗っていました。

歩み寄り、拾ってみると、そこにはチキンの求めていたものが記されていました。

浄化石を使って、不浄な物質全てを消し去る杖の作り方です。今まで、何体もロボットを設計し、開発してきたチキンにとって、そこに書かれている理論の多くは飲み込むことができました。

「ふんふん」

と読み進めていくと、その理論、設計図は途切れていました。未完成です。もしかしたら、これを思いついた人は、ここまでしかわからなかったのかもしれませんが。

しかし、チキンはひらめきました。解きかけの問題の解答がわかったのです。まさか、それが答えだなんて、ちっとも思えないのですが、おそらくそれが答えです。

「よし、そうと決まれば、作ろう。石はいっぱいいるけど、でもみんな協力してくれるさ」

h b

強力な協力

その協力は、とても強力でした。

キングダーキャッスルから、ほとんどの人が続々と石原へと向かいます。材料に必要な浄化石を、チキンポットに運び込むためです。

たった二時間足らずで、ぼんやりした光を放つ三千以上の浄化石が運び出されました。当然のことですが、石原は冷たい暗闇で埋められていることでしょう。

さて、ここまでくれば、後は製造に取りかかるだけですが、力仕事も必要になってきます。

「いやいや、そこんところは俺に任せろって」

ゼブルです。彼は、ドンと胸を叩きました。頼もしく見えます。

「ところで、チキンよ、こいつはどんな発明なんだ？ ラタを救うといつても、どういう救い方なんだ？」

「それは秘密さ」

「そんなこといわずに、俺だけには教えるよ」

ゼブルが、しつこく迫ってきます。

「いうと、効力が薄れてラタが救えないかも」

というと、ぐぬう、とゼブルが顔をしかめます。

「そ、そうか。なら、仕方ないな」

純粋な彼を騙すのは気が引けます。でも、チキンは嘘を吐く方が懸命だと思っていました。なぜなら、この発明品に対して、アダンティーキングダムが邪魔をしてくるかもしれないからです。その時この発明品の構造や仕組みを少しでも知られれば、悪いことがあっても、良いことはありません。

それに、ゼブルは大変なお調子者で、口がとっても軽いのです。それこそ、チキンポットに現れた穴ボコのように、ずつつと口を開いているような状態です。

悪気はないのでしょうけど、そんな彼に事実をいうということは、

子供の国民全員に知れ渡る、と同じだといっても過言ではないのです。そして、ゼブルはいわれたことは、なんでもかんでも本当だと思うので、チキンはそれを利用することにしたのでした。

「ああ、ラタのためにやあ、俺はこのマシンが何なのかなんて絶対聞かないぜ」

と、とつても知りたそうな顔をしながら、ゼブルが鉄材を運んでいます。

夜になっていましたが、浄化石がこれだけあれば、暗さもなんのその。夜たちは、すたこらさつさと逃げています。

ぼんやりとした明るさの中、チキンは設計図を開き、自分のひらめきが本当なのか、少し疑問に思いました。

まさか、あれとあれとが。

いえ、でも、きつとこれが真実なのです。

「おい、運び終えたぜ」

チキンは、ゼブルがヒイヒイって運び終えた鉄材を満足げに見ました。

さて、ここからが本番です。これを作り上げるには、とつても強力なエネルギーが必要なのです。

鉄材をねじ曲げたり、はめ込んだり、それらは普通なら作業用ロボにさせるのですが、ロボを使うにはセブンの許可が必要です。でも、セブンは許可してくれないでしょう。

浄化の情

戦闘用口ボを造るんだ、といって借りようとしても、嘘だとバレて、断られるに決まっています。

ですので、ゼブルの力を借りるしかありません。次期の王座を狙っているだけあって、彼の力はそこそこあります。

「作業用口ボ、貸してやろう」

ふいに、低い声がしました。もしや、と思いチキンが設計図から視線を上げると、そこにはセブンがいました。

巨大な剣を背中に、そして材質不明のブレスレット、腕から顔にかけて掘られている朱色のタトゥー、頭髮はもつと濃い朱色です。

髪型は、左半分がドレッドヘア、右半分は短く刈り込まれています。とつても不思議な髪型です。

「え？」

「だから、貸してやろう、といったのだ。お前は、発明するのに、作業用口ボが必要なのだろ？ これだけの浄化石を溶かして、何かするには、きつとそこのバカだけでは足りないはずだ」

「バ、バカだと！」

キーンツ、とゼブルが奇声を発します。

なぜ、セブンは作業用口ボの使用を許してくれたのでしょうか。

不浄石を使って怪物化させる、という提案はセブンがしたのです。それを結果として邪魔することになる自分の発明に、なぜセブンは協力しようというのでしょうか。

「何か不満か？」

「い、いえ、ぜひ使わせてください」

ここでやっぱ止めた、といわれたら大変です。疑問は疑問でしたが、チキンはこくこくと頭を縦に振りました。

「では、ここに作業用口ボを運ぶよういっておく」

完成しました。それは、ひよる長く、滑らかな杖でした。あれだけあった鉄材と浄化石を溶かし、圧縮した結果、生まれたのがこの杖、浄化杖です。

チキンの背丈ほどあるこれを使えば、世の中にある不浄を、一瞬にして消し去ることが出来ます。ただし、影響を世界に広げるには、できるだけ高いところから振る方が効率的です。

チキンとゼブルは、キングダーキャツルの螺旋階段を一気に駆け上がり、ドラゴンの口に立ちました。ブランコはしまわれ、代わりに守衛二人が眠そうに、見張っています。

ぽっかり開いたドラゴンの口の中に、ひゅうひゅうと夜風が遠慮せずに入ってきます。

「ここで、その杖を一振りすんのか？」

「うん、そうだよ、そうすれば、僕の思う不浄が消えるのさ」

「おお、そ、それが秘密か！」

ゼブルが、目を輝かせます。

「うん、そうだよ」

いよいよ、杖を振る時です。チキンは、後ろへ杖を引き

杖渡し

「ご苦労、ご苦労」

聞き慣れない声に手を止めて、声の主を見ました。すると、そこには、アダントリーキングのブラフがいるではありませんか。

金のボタンに、肩当て、そして王冠。とても威厳に満ちています。百獣の王のバツクルや、細身ではあるものの、鋭さはキルダン大陸一ともいわれるデクスバウワーという剣が、彼の偉大さを引き立てています。

髪は、燃えるような赤色です。右眼は、失明しているらしく白目のままです。左眼も、上から下にかけて縫った痕があります。ブラフは王であると同時に、相当な剣の使い手である、とも聞きます。きつと、今までの戦いで受けた勲章なのでしょう。

「さて、その杖を渡してもらおうかな」

「き、貴様！ どうやってここへ？」

守衛二人が、ブラフに飛びかかりました。けれども、ブラフが何事もなく、後方へ大きく弾かれました。悲鳴とともに、二人はドラゴンの口から急降下。

おそらく、ブラフは魔法を使ったのでしょう。魔法まで使える、とはさすがにチキンも知りませんでした。普通、剣士は魔法が使えませんし、使えてもちよつとした程度です。でも、今のは十分に威力がありました。

「くっ……」

威勢のいいゼブルの額で、冷や汗が光っています。

「そんなに怖いか？」

聞き慣れた声がしました。え、と思っていると、奥から現れたのは

「セブン！」

ゼブルが、素っ頓狂な声を出します。一体、どういうことでしょう

う。セブンは、キンダーキャッスルの王のはず。なのに、ブラフを前にして、なぜ落ち着き払った態度でいられるのでしょうか。

「お前、とつとそいつをやっつけるよ！ ま、俺がやっつけてもいいんだけどよ」

ゼブルがいうと同時に、ブラフが手で空を掻きました。

ドゴツ、という音がし、ゼブルの近くの床が砕けます。

「ひっ」

と思わず、ゼブルが小さな悲鳴を上げました。

「怖いのか？ そして、お前はこの状況をまだ理解していないのか？」

セブンが、半ば呆れたようにいいます。彼の声は、冷え切っていました。

「は？ わけわかってないのは、お前の方だろ？ とつとと、そいつをやっつければ、俺たちの戦争は終わる」

「チキンは、だいたいわかってるようだな」

セブンが、チキンを見ます。その時だけ、子供の王は少し笑みましました。

「おい、我が息子よ、もうあの杖を奪ってもよかろう」

「もちろんです、父上」

この頃になると、ゼブルは目を白黒させて、パニックになっていました。

「あ、あんまりわからねえけど、でも、お前らが悪者だったのは、わかった。よっしゃ、チキン、いっちょ、俺がこいつらをやっつけてやるぜ！」

暗い奪い合い

ゼブルがセブンに劣らぬ大きさの剣を抜き、ブラフに飛びかかりました。

セブンは、それを食い止めようとはしました。ですが、ブラフは左手を軽く挙げて、それを止めさせます。

「くらえって！」

ゼブルが大剣を振るうと、風切り音が唸りを上げました。

ブラフは、それでも落ち着き払ったままです。このまま、ゼブルの剣が彼を斬るかに見えたが、ぎりぎりのところで、ブラフが抜刀しました。

デクスバウワーが、全身を見せます。

二本の剣が、互いを喰らいあいいます。なりふり構わぬ喰らいあいです。

ひとしきり火花を散らした後、ブラフが、「ふん」と力むと、ゼブルが押し合いに負け、後方に飛ばされました。

よろめきつつも、ゼブルはすぐさま体勢を立て直し、再びブラフに立ち向かおうとします。しかし、力の差は明らかです。

チキンは、浄化杖によって、ブラフを消そうと、振りましました。しかし、何も起きません。あれあれ、と何度もやっているうちに、いつの間にか、セブンが背後に回っています。

チキンの手から、浄化杖が奪われました。まるで赤子の手を捻るかのように、あっけないものがありました。

「ご苦労、ご苦労」

ブラフが、満面の笑みを浮かべています。

「念願のものが手に入ったぞ。さて、ここで一振りしたいところだが、邪魔者が多いようだ」

階下から、なんだなんだ、という声とともに、大勢の兵士が駆け上ってくる音がしています。きつと、さっきの騒音を聞きつけたの

でしょう。

「それに、独りで振るのはつまらぬ。うむ、明日の朝一番に、我が国民全員を集め、そこで見せてやる。世界が、浄化される瞬間を」
ブラフは、独り言のようにいつてから、浮遊の魔法を自身にかけ、ドラゴンの口から降り立ちました。続いて、セブンも、です。

「ぐおおおお！ 俺を差し置いて、あいつらなめてんのか！」
怒りと悔しさで、ゼブルの顔は、赤くなったり青くなったりを繰り返しています。

「ええいっ！ こしゃくな！ ゼブルの本気を思い知らせてやる。

おい、チキン、バトルロボを呼び出せ」

「そ、それより、もつといい方法があるよ」

「な、何？」

「うん、ちよつと見てて」

チキンはすたすたとドラゴンの口の右側に行き、そこに隠れるようにしてある小さな黒いボタンを、踏みました。すると、ドラゴンの口が閉まり、床から操縦席と、ピカピカの円盤状の床が姿を現しました。

「な、なんだ、なんだ？」

ゼブルが、驚いています。

「うん、実は、この城を、こっそりと改造してたんだ」

戦闘

「な、なるほど」

チキンは早速操縦席に乗り、ゼブルにその円盤に乗ってくれるように頼みました。

「お、おう」

ゼブルが、円盤に乗りました。

すると、操縦席と円盤が上へ上へと移動します。そして、ついに、ドラゴンの両目の位置にまで到達しました。

「えーっと、チキンは操縦すりゃいいんだろっが、俺は一体何をすればいいんだ？」

「うん、このドラゴンはね、必殺技を繰り出す時は、その円盤の上にいる人の力が反映されるんだ」

「ほうほう、なら、俺にぴったりの役じゃないか」

「はいますが、チキンはかなり不安です。しかし、この際、贅沢はいつてられません。」

チキンは、ドラゴンを始動させました。

ドラゴンの鼻の穴に、光が宿ります。かなり遠くまで、照らし出されています。チキンが手前の赤いボタンを押すと、ドラゴンの鼻の穴から、チキンの目にかけて、とつても長い筒が伸びてきました。そこに目を当てると、すっかり遠くまで見渡すことができます。

「動かすよー!」

チキンが、レバーを倒します。

ドラゴンは、キンダーキャッスルの、レゴブロックの塀から抜け出し、立ち上がりました。

下から悲鳴が上がります。何が起こっているのか、説明したいのは山々ですが、時間はありません。今は、一刻も早く浄化杖を取り戻さなければなりません。

「ところで、セブンとブラフはどこにいるんだ？」

「ちょっと待ってて」

チキンは、ざっと大地を見渡しましたが、キンダーキングダム周辺は深い森林で覆われているため、よくわかりません。

「今、何時かな？」

「ええつと、十時を越えたところだな」

「よし、じゃあ、火炎放射だ」

「……は？」

ポカーン、と口を開けたままのゼブルをよそに、チキンは座席下にあるレバーを引きました。ガゴゴゴ、と鉄板を引きずって螺旋階段を上がっている音を、さらに激しくしたような騒音が、下から聞こえてきます。

チキンは、座席横の透けている床から、ドラゴンの口の部屋を見ました。すると、すすけた長い筒が登ってくるのが見えます。筒には、チキンの拳ほどの穴が、ぱらぱらとついています。筒先は、すでにドラゴンの口に向けられています。

チキンが操作を続けると、ドラゴンの口が、ガタラガタラと開かれました。錆びついているようで、滑らかな動作ではありません。

「えーつと……」

ゼブルが、円盤の上で、指をくわえて、立っています。

「ドラゴンの鼻は、僕が使っているけど、両目から顔を出しているよ。手で、開けられるから」

火炎

「お、おう」

とゼブルはいい、左目の横にある取っ手を引っ張り、開けました。

チキンは火炎の強さを調整するレバーを最大限にし、そして発射ボタンを押しました。

ドラゴンの口から、森林に、想像を絶する炎が撃たれました。

「どひゃあ。なんでえ、森林なくなっちゃうぞ、チキン」

炎は、口から離れるにつれ、横幅が大きくなっています。ドラゴンは首を左右に振りながら、森林を燃やしてゆきます。

「お、おい、もういいだろ？」

ゼブルが、左目から離れて、チキンの頬を突きます。

「う、うん」

チキンは、火炎放射を止め、黒こげになった大地を眺めました。すると、黒がぎりぎり進出していない辺りに、セブンがいました。

最新型のキンダーロボを従えています。蒸気で動くので、排出筒が、背中からよきりと生えています。そのロボは、セブンの六倍ほどの大きさを誇っています。細かい作業ができるように、手の関節は人のようにしてあります。しかし、細かい作業より、人を殺すことを得意としています。

「お、おい、あのロボより……どうしてあいつらが生きてんだ？」

チキンの心臓が、大きく跳ね上がりました。キンダーロボの右手には魔法を得意とするピ。ピスが、左肩には監視も任されていた目のいいブレティがいるではありませんか。一体、どういうことでしょう。

チキンはドラゴンの足を進め、セブンとの距離を一気に縮めました。

「どういうことだ！」

拡声器を使い、ドラゴンの口から叫びますと、

『どついつこともくそもないだろ。全ては、お前に浄化杖を作ってもらったのだ』

頭に声が響いてきます。どうやら、精神共有の魔法を使っているようです。

セブンの冷たく、やや棘のある声が、チキン、そしてゼブルの胸に流れてきます。

『俺はな』

聞けば、聞くほど、チキンたちの人生の全ては、大人たちの策略で作られ出したものでした。大人達は、ただ浄化杖が欲しかっただけなのです。

セブンは自分の父上とともに、かつて不老不死の力を得ました。不浄石と持続石をある方法で融合させると、不老不死の薬が生まれることを、キルダン大陸一の頭脳を持つ研究者が発見したのです。

無論、多くの大人たちも、不老不死を得ました。しかし、老人たちは、それに反対しました。人々は限りある命だからこそ、頑張れる、と。それからというもの、老人と大人はいがみ合い、結局老人は子供を連れて、大人の国を去りました。

『あれから、どうなったのかは知らない……』

それから、セブンの声が、チキンの頭に次々と突き刺さります。『子供なのに、老人の国に連れていかれなかったのは俺だけだ。父上、我が祖父を殺したのだからな。』

大人と老人は、今もまだいがみあっている。最初、老人と大人は話し合いによって争いをおさめようとした。しかし、話が交わることはなかった。だから、戦争が始まった』

戦争による演奏

老人と大人の戦争、それは実に激しかったそうです。大人たちは不老不死といえども、攻撃を受ければ怪我しますし、時間による死は避けることができて、銃弾や剣による死は拒めなかったのです。しかも、老人たちは予想以上に強かったのです。

老人の頭、そして身体がまだ発達しきっていないけれども、力はそこそこある子供たち、彼らの協力は、強力でした。

いつしか、大人たちは防戦一方で、攻撃することができない状態になりました。けれども、老人たちには攻撃し続ける力がなくなりかけている頃でしたので、戦争はとりあえずやめておこう、ということになりました。

それからです。大人の王ブラフが、老人たちをまとめて始末する方法を考えたのは。老人といっても、四十歳以上の者です。父親、母親にもなれる歳です。にらみ合っているだけでも、老人の国の人数は減りません。

ブラフは、王室で溜息を漏らしていました。金の玉座、金のベッド、金の机、もう全てが金でした。

「どうしたものか」
考えているところ、こんこんと、扉がノックされました。

「入れ」

許可すると、ひよろひよろの研究者と、眉もヒゲも濃い大臣が現われました。

「こやつに、いい考えがあるそうですぞ！」

大臣が、嬉しそうにいます。

王は頷いて、研究者の発言を許しました。

「浄化石から作った杖で、あやつらをきれいさっぱり消し去るとい
うのはどうでしょう？」

「しかし、どうやって？ あれに触れるだけで、我々大人は消えて

しまつのだぞ？」

「そこは、子供にやってもらうのです」

「しかし、この国にいる子供は、まだ我が息子セブンだけであるぞ」
「ええ、しかしこれからは生まれてくるでしょう？」

研究者の案は、こういうものでした。石原を越えた辺りに、キンダーキャッスルを作ります。そして、そこに研究施設とキンダーキャッスルを作り、セブンを王として置くというものです。

「ほほう、それで、次はどうするのだ？」

「ええ、次は、そこに三歳ほどの赤ん坊どもを放り込むのです。もちろん、彼らの世話はセブン殿一人でやるのは無理でしょうから、何人かの子供を不老不死にし、送り込んでおくのです。だいたい、歳は十五歳くらいでいいでしょうかね。そうすれば、子供の国の誕生です。研究所には、浄化杖の設計図を隠しておきます」

「隠す、とな？」

「そうです、そうです。ちょっとした仕掛けを作っておきます。まあ、これくらい見抜けないでいては、きっと発明はできないでしょうから」

「いや、待て待て、そもそも、我々で作ればいいだけの話ではないのか？ なにもそのような手の込んだことをせずとも……」

「いえ、それが、その……」

急に研究者が、しどろもどろになります。

開かれた真実

そこへ、すかさず大臣が話に入ってきました。

「残念ながらこやつには、それ以上はわからない、とのことですよ」

「なんと、お前はキルダン大陸一優秀な研究者ではないのか？」

「この浄化杖とやらは、我々大人の脳では作れない、という構成になっっているようなのです。いえ、正確にいいますと、不老不死だの汚れた心だのを持っていると、完成させることは無理でして……」。

やはりきれいな杖ですから、きれいな心を持つ者でないと作れません。大人の事情に染まっていると、駄目なのです。ですから、何も事情を知らない子供にしか作れないのです」

「ううむ、だからわざわざ子供の国を創ってやらねばならん、というのか。しかし、子供ごときに、浄化杖を作れるのか？」

「そこは心配いりませんぞ」

大臣が、またも話に割って入ります。

「完成していない設計図とはいえ、それをキルダンキャッスルの横に建てる研究所に隠しておくのですからな。それを見れば、まあ後は問題ない、と思えますな」

「ふうむ、確かに。御主にわからぬところは、きつときれいな心でしかわからぬところであろう。とすると、その、なんだ、ちょっとした仕掛けで隠している設計図を見つかるほどの知能があれば、簡単、ということか」

「そうです、そうです」

大臣が、もみ手をしながら、大きく頷きます。

「よし、ならば、キルダンキャッスルを造るとするか。しかし、石原を超えたところで造るのか？」

「いえいえ、あの地は、資源に恵まれておりませんので、移動式の城を造って、あそこで組み立てるのがいいでしょう」

大臣が、提案します。彼がいうには、動ける城を造り、その中に

城壁の材料を詰めて、移動させればいい、ということですよ。

「ふうむ、職人たちを、遠方に置いておくと、もしアダンティーキヤッスルが壊れた時、困るからな」

大臣の提案は、なかなかいいところを突いています。というのも、アダンティーキングダムも、今はまだ人手不足でしたから。特殊な職に就いている者は、特にそうです。ですから、なるべくアダンティーキングダムから、人を出したくありません。

やがて声は途切れ、チキンの心は冷えていきました。

セブンの話が真実だとすれば……いいえ、真実なのでしょう。チキンが前々から思っていた疑問が、セブンの話で一つにまとまるのですから。

キンダーキングダムの国民が消えないのは、大人の国から子供が送られてくるためでしょう。いえ、正確には国民がすっかりいなくなった時、子供が送られるからなのでしょう。

チキンポットにしても、領けるところが多くあります。使い込まれた感のある研究所、あれは本当に多くの子供の研究者によって使われていたのです。その研究所が、なんの目的で造られたのかも知らずに。

対峙して退治

そうして、何度も繰り返し返していくと、きっと浄化杖を発明する頭を持った子供が出てくるわけです。

しかし、どうやってブラフは、浄化杖が作られたことを知ったのでしょうか。精神共有の魔法は、あんまり離れていると、使えません。

「で、でも、一体どうやってブラフは……浄化杖ができたことを……」

「そこも、父上はお考えの上での実行だ。お前が浄化石を使えば、石原は闇で満たされるのだから。それが俺から父上への合図、ともいえる。そして、浄化杖を作ること自体は、一日で終わる。そのことは、研究者も知っていた」

「な、なんて頭のいいやつらなんだ」

ゼブルはとても感心し、敵なのに、うっかり褒めてしまいました。すかさず、チキンは「褒めちゃダメだよ」と文句をいってから、ピピスとブレティを見ました。

「君たちは、僕を裏切ったのか！ この国を裏切ったのか！」

チキンが、拡声器越しに怒鳴ります。おうよおうよ、とゼブルも円盤から降り、拡声器に向かって吠えます。

「チキン、これも計画のうちさ。一体、僕たちが何度怪物化したと見せかけたと思っっているんだい？」
とピピス。

「こうやれば、人々は怪物化を止めるために、世界を浄化しようとするだろ？ 思い出してみろよ。今まで、お前に世界を浄化させようと思わせた出来事はどれだけあった？」
とブレティ。

精神共有の魔法で語りかけています。

ああ、今にして思えば、セブンの大人になりかけた者を怪物化さ

せるという案も、そして図書館員がチキンに浄化石の本の貸し出しを年齢を理由に断ったのも、浄化杖一本のために、なされた巧みな計略だったのでしよう。

いえ、まだまだ気づいていないところがあるかもしれませんが、チキンが今わかったところは、それくらいです。

『もう、俺たちを殺そうとするのは止める。世界は浄化する。それは大人の視点から見ての浄化だが、な。もちろん、真っ先に消すのはエルダリーキングダムだ。キンダーキングダムは、まだわからない。しかし、大人に反抗しなければ、浄化の対象にはならないだろう』

「なあに、ふざけたこといってやがんだよ！　うりゃあ！　俺はな、ひねくれた野郎が嫌いなんだよ。特に、お前らのようなややこしいことやってくるやつはな。だから、ぶっ倒す」

どこかピントがずれていますけど、このままでもあまり問題は無い、とチキンは判断して、彼の主張を止めないでおきました。

「あんなやつ、このドラゴンに比べりゃあ、大したことねえだろ？」

ゼブルの顔が、チキンへ向けられました。

「おし、いっちょう、俺が本気を出してやるか。必殺技は、俺にかかってんだろ？」

びよこん、とゼブルが円盤に飛び乗りました。やる気満々です。

一方、チキンは、内心冷や冷やものです。

解除で解消

セブン一人でも、勝てるかどうかわからないところに、あのキンダーロボです。造り主であるからこそ、あれの性能を十分に理解しています。

ドラゴンは、元々キンダーキャツスル移動のために造られたものです。それに、チキンがおまけとして火炎放射器や必殺技吸収の円盤を取りつけただけ。勝つ見込みは薄いです。でも、やらなければ何も始まりません。

「いいよ、じゃあ、ゼブルの思う必殺技を頼むよ」

「よっしゃああああ！ゼブル・ビッグバン！」

ゼブルが剣を引き、力をためてから、ネジ巻きのような回転を加えて、突き出しました。空気が切り裂かれ、炭酸の泡がいくつも弾けたような音が奏でられます。

ドラゴンも、それに合わせ、青い腕を引き、グルングルンと文字通り回転させ、鋭い鉤爪で、目の前にある全てをなぎ払おうとしました。

ゼブルの動作が、そっくりそのまま、いえ、本家本元を超えた技を繰り出しています。

セブンも、これには驚いたようで、一步退いています。

焦げた大地を、ドラゴンの腕の一振りで起こされた風が切り裂きます。

そのまま、キンダーロボを砕くかに見えました。

その時です。

ピピスとブレティが人差し指を天に向けて、呪文を唱えます。キンダーロボは、薄い紫色の球体で覆われました。

その球体によって、ドラゴンの腕の勢いが殺されます。薄くてもろそうに見えるのですが、案外そうでもないらしいです。

「なんてこったい！」

ゼブルがショックを隠しきれず、嘆いています。が、すぐに気を取り直して、円盤の上で、暴れ回りました。

「わわわわ、そんだけやったらダメだよ！」

とチキンは止めたのですが、時すでに遅し。

ドラゴンへ、十を超える必殺技の情報が叩き込まれました。

「くらえっ！」

ピピスとブレティが、炎の魔法をぶつけてきます。ドラゴンは燃え上がり、そこへセブンが、剣による斬撃を加えます。

斬撃は、嵐のような叫びを発し、ドラゴンの腹部を切り裂きました。

下で悲鳴が聞こえます。が、やはり説明している暇はありませんし、今もまだピピスとブレティによる炎の軍団、セブンからの斬撃が連続して撃たれています。

チキンは腕を上げて、防御しようとしたが、ゼブルの必殺技のコピーが始まってしまいました。

ドラゴンは、グオオオ、と低く唸ってから、まるで地団太を踏む子供のように、足をジタバタさせ、地震を作りました。

これには、さすがのセブンも驚いたようですが、すぐに浮遊の魔法を使い、ドラゴンの腹部めがけて突進してきます。

まずい、とチキンは思いました。そこで、必殺技キャンセルボタンがあることを思い出し、すぐにそれを押しました。そして、腕でセブンを叩き落とそうとしたのですが

ら、と思うと、ゾツとします。

「大丈夫かよ、おい」

ゼブルの心配そうな声が聞こえました。しかし、姿が見当たりません。

「ああ、こつちだ、こつち」

声のする方を見ると、ゼブルもベッドの上で、横になっています。個室ベッドだと思っていましたが、どうやら無理やり詰め込まれているようです。きっと怪我人が多いのでしょう。

ゼブルは、包帯でグルグル巻きにされていて、まるでミイラです。俺たちは、負けちまったなあ……」

浄化杖は、取られてしまいました。あれをブラフに使われ、世界から不老不死ではない人が消え　そこで、ふとチキンはあのことを思い出しました。

浄化杖を振ったのに、反応がなかったこと。

石原では、不浄石と浄化石の混じっているところの光の方が、強かったこと。

チキンは、自分たちが結果として、負けてはいなかったことを知りました。

「僕たちは、戦いには負けたさ。でも、結果として勝てた」

起き上がるうとして、左手に鋭い痛みが走ります。右手で布団をめぐってみると、包帯でまかれていました。どうやら、骨折しているようです。

「あん？　どういこうったよ。浄化杖は持ってかれちまった」

「確かに浄化杖は、その人が願う不浄を消してくれるものだよ、あの設計図通りに造ったのならね」

「あん？　じゃあ、チキンは、そうしなかった、と？」

「まあね、というか、そうせざるをえなかったんだ。あの杖は、実はね、浄化石の他に、不浄石をすりつぶしたものを、ちょこつと入れなくちゃならなかったんだ」

「おいおい、じゃあ浄化杖じゃないだろ？」

ゼブルが、ゲホゲホと咳き込みました。肺が、やられているのかもしれない。

「うん、全くないなものなんてないんだよ。というか、『浄化』も『不浄』がなければ浄化の力を発揮しないんだよ。だから、どうしても、不浄石が必要だった。それにね、ほら、僕、浄化杖を振ったけど、全然反応しなかったでしょ？」

「あ、そっぴや、お前セブンに浄化杖取られたけど、取られる前に、何度も振っていたよな」

「うん、それはね、きつと『不浄』がなかったからなんだ」

「は？」

「浄化杖が、浄化をするのに、不浄を必要としているように、振る者は不浄の者でないとだめなんだ。じゃないと、浄化杖は浄化の力を発揮しないんだ」

「とすると……」

「ブラフほどの適任者は、いないってこと！」

「うおおお！ すげええええ！」

ゼブルは声を張り上げましたが、すぐに「イテテエ」と弱い声を漏らしました。

今頃、ブラフは浄化杖を満面の笑みを浮かべて振り終えていることでしょう。それが、自分をも消し去る行いだとは知らずに。

と、ドアがノックされました。誰でしょうか。

チキンは、どうぞ、といました。すると、そこには、ラタがいるではありませんか。

「ラタ姉！」

「ラタ！」

チキンが叫び、ゼブルも叫び、そしてゼブルは「イテテエ」と呻きました。

チキンは、とっても嬉しく感じました。ラタの怪物化を止められたのですから。怪物なんていう不浄は、この世から消えたのです。

しかし、ラタの顔はとっても悲しそうでした。いえ、悲し『そう』

どころではありません、本当に悲しんでいます。その証拠に、彼女の瞳からは、とめどなく涙がこぼれています。

「どうしたの？ もうラタ姉は、怪物にならなくていいんだよ」

「違うの……ごめんね、今まで嘘吐いていて。実はね、私もね……不老不死の身体なのよ。大人の回し者なの！」

空気が凍りつきました。

「私の役目、それは子供たち、特にあなたのような賢い子に、浄化杖を開発するように持っていくこと」

「じゃ、じゃあ、ピピスやブレティが怪物になって、泣いていたのは……」

「違う！ ピピスやブレティが、怪物になったというのは嘘だし、そのことは知っていたわ。でも、悲しかったのは本当よ！ 私は、もうこんなことはしたくなかったの。怪物になる、といいながら、本当は生きていて、子供たちが全員死んで、新たな子供が送られて、それでまた私が嘘を吐くなんてことはしたくなかった……私は、セブンのように強くはなれなかった……できるものなら、本当に怪物になって、大人を殺して、自分も死にたかった……」

ラタが、その場で泣き崩れました。

ラタのいつていることは、本当のことでしょう。心から、子供たちを愛していたに決まっています。それは、ラタの子供たちへの接し方からもよくわかることです。

「じゃあ、あの戦争とか平和の授業も……」

「あれは、私が勝手にやったことよ。今までの授業が全て、大人たちによって決められていたものだから……本当に私がいいなかったこと、教えたかったことがいえないでいたから……」

「でも、もう大丈夫だぜ。ブラフがなーんにも知らずに、浄化杖を振って」

ゼブルの言葉が、止まります。

そこには、信じられない、いえ信じたくない光景が生まれていたからでした。

ラタの身体が、白く光り、足からどんどん消えていつているのです。

「私をもっと早く大人たちに反抗していれば、こんなことには……」
ラタは、チキンの頭を優しくなでました。彼女の頬から、ぽつぽつと落ちる涙がチキンの頬を濡らします。その涙も、白く光っていました。

「いずれあなたたちは大人になる……でも、同じ歴史を繰り返さないようにしてね。私は思うの、ブラフを王とする大人たちも、多分昔は」

ラタの言葉と涙は、ふつつりと切れ、後にはゼブルとチキンが残されるだけでした。

真の浄化（後書き）

本作は、我が人生における初の児童文学作品、です。対象年齢小学校四年生以上を想定しておりますが、友人からはその年代からしてみれば、やや難しいのでは、いや、待てよ、そもそもその年代というと、読解力にはらつきが、かなりあるような……という具合に果たしてどこまでが小学四年生以上にとって難な表現であるか否かが、かなり私を苦しめました。思い返すと、私が小学三年生だった時、小学五年生以上対象の「モモ」を読んで、さっぱりだったことがあります、そうすると、やはり本作は五年生以上にすべきか、とも考えました。結局、わからないんですけどね。

ところで、本作は何かと初の試みが多いのです。短編における「です・ます調」を使用したことも、イラストから小説という逆パターンというのも初めてでした。色々と小説的なことに関して頭を痛めるのは、前々からなので、さしたる問題ではないといえませんが、別段特筆すべきことはありません。

ただ、最大の問題は、やはりキンダーキングダムイラストにおいて、相当程度の世界観が構築されていた、ということが自分にとっては何問題でした。

Cats The Moke氏のイラストには、ある程度の世界観が構築され、なおかつキャラクターの性格まで決められていたのです。京大に通う知能に優れた友人にそれを言うと、「ちよ、その絵師でしゃばりすぎ（笑）。お前から発想（設定）を抜いたら、何が残んの？」と言われました（友人言い過ぎ）。設定や世界観だけは、酷評二人組のみならず、ネットにおいても、意外と高評価を得ております。

しかしながら、積極的に自分から書く、といったのだから、自分に責任があるわけで、なおかつ展開が奇遇にも脳内で再生されたから、というのがありました。

早速、書き終えてみると、どうにも導入部分の弱さが目立つかな、というのが率直な気持ちです。つまり、言ってしまうえば陳腐な世界観でも、導入部分で読者を引き込む、という技術が私にはなかったのです。それでも、なるべく努力しましたが、奮迅の甲斐も虚しく、失敗したようです。

後、児童文学のくせして、小学生の読者なんているわけがなく、その反応が欲しい今日この頃。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9093f/>

歳分かれの国

2010年10月8日15時51分発行